

# 小 児 救 急 応急手当マニュアル

(平成 19 年 3 月改定版)



小児救急医療確保調整協議会  
(八幡浜・大洲圏域)

# 小児救急・応急手当マニュアル

## はじめに

限られたページ数の中で、全てを記載できませんが、子供の病気の症状の特徴や小児救急について、要点を述べております

小児の保護者が、かかりつけ医や救急にかかる時のために参考にいただければ幸いです

## 1 小児の特徴を知る

乳幼児は、頭が大きいので、重心が高く、バランスを失って転びやすい

乳幼児は、手に触れたものは、なんでも口に持っていきます

(不慮の事故死のうち特に1歳未満は、窒息によるものが多い)

小児は、好奇心が強く、想像も出来ないような遊び方や、  
道具の使い方をします

小児は、行動が自己中心的で、怖いもの知らずです

小児は、前後左右の判断ができず、突然飛び出したりします

(不慮の事故死のうち特に1~4歳は、交通事故によるものが多い)



## 2 普段から呼吸や脈拍数を知っておく(正常値)

年齢層	新生児 生後28日まで	乳児 29日~1歳未満	幼児 1歳~7歳未満	学童 小学生	成人 中学生以上
呼吸数(毎分)	40~50	30~40	20~30	18~20	16~18
脈拍数(毎分)	120~140	110~130	90~120	80~90	60~80

## 3 かけがえのない小さな命を救うために

なるべく赤ちゃんを1人にしないで

よく眠っているからと言って赤ちゃんを1人にしないようにしましょう

晴天時の車内は夏でなくても高温になり非常に危険です

赤ちゃんの行動範囲を過小評価しない(予想以上に動き回ります)

転がり落ちそうなところ(机、テーブル、ソファの上等)に赤ちゃんを放置しない

年齢に応じた玩具を!重いもの、小さなものは赤ちゃんに危険です

家具のそば、水のそばは大変危険です。目をはなさないように注意!

はさみやカッターなど危険なものは手の届くところから排除する

タバコなども手の届かないところへ置きましょう

(赤ちゃんの目線で一度周りを見てみましょう)

赤ちゃんが今どこにいるか、何をしているか常に知っておきましょう

さわるな、食べるな、ダメというような言葉を早めに教えましょう

(走るよりも声は早く届き、いざというとき役立ちます)



## 4 小児の救急疾患の特性

乳児は発熱、けいれん、嘔吐、下痢などの症状が多い

幼児は身体発育と行動発達のアンバランスによって、異物誤飲、中毒、やけど、転倒、水におぼれるなどの事故を起こしやすい

学童では喘息発作、集団食中毒、虫垂炎などの病気を念頭に置いておく

学童は交通事故（特に自転車事故）が多い

## 5 観察と応急手当

### けいれん

発作時には衣服を緩め、吐いた物を誤嚥（ごえん：気道に異物が入り込むこと）しないよう顔を横に向けましょう

舌をかまないように割り箸などを口に差し込むことは、かえって刺激になったり、舌の根元が落ちこみ気道を塞ぐ危険があるため必要ありません

急激な体温の上昇はけいれんを起こすことがあるため、気をつけましょう（日頃の十分な観察）

**{ 早めに病院や医院へ受診する方がよい場合 }**

熱を伴うけいれん

初めてのひきつけや一過性のひきつけが起こった場合は、かかりつけの先生に受診しましょう

**< 次の症状がある場合、**

**至急かかりつけ医に電話**

**または救急で病院へ >**

高熱で何回もけいれんをくりかえす

けいれん発作が止まっても顔が青白く、ぐったりとして意識がもうろうとしている

引きつけが10分以上たってもおさまらない場合



### 発熱

37.5度以上の体温が確認されたら一般的に発熱とされています。しかし、1日の体温の差が1度以上あれば、37.4度以下でも発熱の可能性がります

乳児は平熱が高く、1日の体温の差が1度くらいあるのがふつうですから、夕方は37.5度近くになることもよくあるため、かぜ症状もなく、元気で、食欲もあれば発熱と思わなくて結構です。

元気なときに何度か熱を計り、平熱を知っておくことが大切です

脇の下で体温を測り、熱の状態を確かめましょう

嘔吐やけいれんといった随伴症状に注意しましょう

氷のう(水ぶくろ)や絞ったタオル等で頭や脇の下を冷却しましょう

熱が高いからといって全身を毛布等でくるんだりすると、かえって脱水症状を引き起こすことがありますから注意しましょう

十分な水分をとらせましょう

{ 早めに病院や医院へ受診する方がよい場合 }

咳、鼻水、下痢、嘔吐が激しいとき

食欲がなく水分が十分とれないとき

生後6ヶ月未満の乳児で熱が高いとき

< 次の症状がある場合、至急

かかりつけ医に電話または救急で病院へ >

生後3ヶ月以内の赤ちゃんの発熱

熱が40.0度以上ある

熱とともに、嘔吐をくりかえす

熱とともに、激しい頭痛と嘔吐がある

熱とともに、歩けないほど激しい腹痛がある

熱があり、泣きっぱなしで、親があやしても泣きやまない

熱があり、あごが胸につけられないほど首が硬直している

## 嘔吐

嘔吐に伴う別の症状（随伴症状）と吐物の性状を見ましょう

（けいれんがおきたり吐物の中に血が混じるなど）

十分な水分をとらせましょう

吐くのがおさまったら、イオン飲料、水、番茶などをふた口ぐらいずつ（おちょこ1杯程度）を5～10分間隔に飲ませます。

（吐き出されないよう少しずつあたえる 氷のかけらをしゃぶらせるのも有効）

柑橘系や炭酸飲料、牛乳など胃に負担のかかる飲み物は不適當です

{ 早めに病院や医院へ受診する方がよい場合 }

持続的な嘔吐

嘔吐により水分が十分とれないとき

くりかえしの嘔吐

（原因を調べてもらいましょう）

< 次の症状がある場合、至急

かかりつけ医に電話または救急で病院へ >

生後2ヶ月以内の赤ちゃんがくりかえし嘔吐する

嘔吐と高熱がある

持続的に腹痛をともなう嘔吐



口のまわりにじんましんやはれ、かゆみのあるときの嘔吐  
吐物の中に血や胆汁が混じる（至急に原因を調べる必要がある）  
お腹が異常に膨らんでいる  
お腹にしこりを触れる  
ぐったりしている  
おしっこが半日も出ない

## 下痢

下痢便の性状（色や形等）を確かめましょう  
嘔吐と下痢は同じようなものです  
（嘔吐は上部の消化管から出て、下痢は下部の消化管から出る）  
下痢に伴う別の症状（随伴症状）を見ましょう  
（腹痛がおきたり便の中に血が混じる等）  
十分な水分をとらせましょう（ミルク、牛乳は不適です）

**{ 早めに病院や医院へ受診する方がよい場合 }**

持続的な下痢

水分が十分とれないとき

（脱水の予防と治療が必要）

腹痛が強く、下痢が一日に数回以上ある

便の性状には、水様便、脂肪便、粘液便、顆粒便、不消化便などがありますが、不安な場合は便を持って、赤ちゃんを受診させましょう

**< 次の症状がある場合、至急 >**

**かかりつけ医に電話または救急で病院へ >**

大量の血液が便にまざっている

下痢と高熱がある

熱はないが、下痢でぐったりし、水分がとれない

下痢とさし込みがともない、痛みが長時間持続する

6ヶ月未満の赤ちゃんで熱を伴う下痢

吐き気が強く、おしっこの出が悪い



## 腹痛

乳幼児は不機嫌、普段とちがう泣き方などから、腹痛などのあることを判断しましょう

子供がお腹が痛いと訴えたら、無理に食べさせないほうがよいでしょう

何か欲しがっても、水分を少しずつ、様子を見ながら与える程度にしましょう

必要であれば腹痛を和らげる体位（体をまるめた姿勢など）にしましょう

**{ 早めに病院や医院へ受診する方がよい場合 }**

便に異常のある場合（便をとり先生に見せてください）

## < 次の症状がある場合、至急

かかりつけ医に電話または救急で病院へ >

腹痛で歩けない

高熱を伴った痛み

腹痛でいっこうに泣きやまない

顔面蒼白で、吐き気、嘔吐、下痢、発熱、咳、鼻水、頭痛、  
のどの痛み、めまいなどがある



## 咳 嗽（せき）

咳の仕方や様子確かめ、必要があれば感染防止のため

マスクの着用をしましょう

喘息（ゼーゼー）や顔色不良といった症状に注意しましょう

蒸気（湿気）は、ほとんどの咳に効果的

{ 早めに病院や医院へ受診する方がよい場合 }

乾いた咳が継続する

熱が高い

## < 次の症状がある場合、至急

かかりつけ医に電話または救急で病院へ >

乳幼児で、普段より呼吸数が多く、顔色が悪い

呼吸が苦しそう、咳の合間の息つきが大変そう

（咳の合間に速い息をしたり、肩を持ち上げたり、全身で呼吸している）

咳の発作が終わるとき、ヒューヒューという激しい吸気音がする

## 誤 飲

高さ1メートル以下の場所に直径32ミリメートル以下のものを置かないようにしましょう

呼吸に変化があるのかないのか確かめましょう

何をどのくらい飲み込んだのか確かめましょう

赤ちゃんの口の中を見て異物があれば、指でかき出しましょう

この時、あまり無理をしてのどの奥の方へ異物を入れないよう注意しましょう

吐かせることによって気道（空気の通り道）を傷つけたり、気管にはいると肺炎を起こしてしまう場合があるので注意しましょう

例・・・灯油やシンナー等の石油製品、漂白剤、酸性やアルカリ性の強い洗剤などは吐かせてはいけません

漂白剤、酸性やアルカリ性の強い洗剤は牛乳や卵白を飲ませ毒性を薄めることが出来ますが、パラジクロロベンゼン（防虫剤）や灯油は脂溶性のため、誤飲後2時間位は牛乳、油脂、脂肪食などを与えてはいけません

ボタン電池を飲み込んだときは、すぐに病院へ行きましょう

(電池は食道内に停滞した場合は化学熱傷を起こし、胃の中に停滞した場合は、消化管に穴があくことがあります)

飲み込んだものにより応急手当の方法が違うため、**水や牛乳を飲ませたり吐かせる前にまず119番通報するか、かかりつけの医師または中毒110番へ問い合わせてください**

大阪中毒110番 072-727-2499 (24時間)

つくば中毒110番 029-852-9999 (朝9時~夜9時)

たばこ専用電話 072-726-9922 (24時間 テープ)

## 窒息 (気道異物)

窒息の状況を確認めましょう (呼吸をしているのかどうか)

ピーナッツなどの豆類やあめなどに注意しましょう

除去方法について

指拭法 (ししょくほう)・・・指で口の中をかき出す方法

背部叩打 (はいぶこうだ)・・・背中 (肩甲骨と肩甲骨の間) をたたく

嘔吐反射 (おうとはんしゃ)・・・指を口の奥深く入れて、  
のどの奥を刺激すると嘔吐する反射機能を利用する



## 溺水 (水におぼれること)

水を吐かせる行為より、呼吸をしているかどうかの確認が最優先

10cm~20cmぐらいの溜まった水でもおぼれることを知りましょう

(家庭の浴槽や洗濯機などにも注意が必要です)

必要に応じ、人工呼吸、胸骨圧迫を行いましょう

(日頃、消防署で救急法などの講習を受けておくこともおすすめです)



## 頭部打撲

意識があるかどうか確かめましょう

吐く、けいれんがあるかどうか等確かめましょう

1日~2日ぐらいは注意深く経過観察しましょう

安静にして冷たいタオル等で患部を冷やしてあげましょう

変だなと思ったら先生に相談しましょう

耳や鼻からの出血や液体のものがみられるとき、けいれんや嘔吐があるとき、意識がないとき、自分の意思で体の一部分を動かせないときは、

至急 (救急) 病院へ受診しましょう



## やけど

電気ポットや炊飯器の蒸気に注意しましょう  
ストーブやアイロンなどの電気器具に注意しましょう  
低温やけどに要注意  
(電気毛布、電気カーペット、電気あんか、湯たんぽなど)  
とにかく流水により冷却しましょう  
(水泡を破らないで病院や医院へ受診しましょう)  
ただし、広範囲の場合は冷水に浸してはいけません  
体は清潔なシーツで覆ってから毛布をかけて保温し、  
救急車を呼ぶ(低体温に注意)



## 6 119番通報要領

電話口に要領を記載したメモを用意しておく  
(とっさの時にあわてない)  
火事ですか、救急ですか  
(通称名のほうがはっきりする)  
目標になる建物はありますか  
( 商店の前等)  
どうしましたか、どんな状態ですか  
(意識あるなし、年齢、性別、状況など)  
あなたの名前は  
電話番号は  
携帯電話での119番は、電波の状況等により、  
かけたつもり以外の消防署へつながることがありますの  
で、その時は一般電話(携帯以外の電話)でかけ直すか、



最寄りの地区番号 **大洲消防署 (0893-24-0119)**  
**八幡浜地区消防署 (0894-22-0119)**  
**西予市消防署 (0894-62-0119) にかけて下さい**

(参考文献)

- 1) 水井三雄:「水井こども医院」ホームページ こどもの医学あれこれ
- 2) ジョン・ガーウッド、アマンダ・ベネット、青木玲訳 山田真日本語版監修:「子どもの症状の見分け方 小児科へ行く前に」ジャパンマシニスト社発行
- 3) 愛媛県、愛媛県医師会、愛媛県小児科医会:「子どもの事故は病気です！」
- 4) 愛媛県医師会、愛媛県小児科医会:「初めての病気のケア」
- 5) 愛媛県医師会、愛媛県小児科医会:「赤ちゃんのうんちどう？」